

池田の大眾文化

～昭和大阪芸能史～ その二

先月号の明治時代以降の池田の大眾文化では、呉服座を中心に紹介してきました。2回目の今号は、大眾文化の一つ「映画」に焦点を当て、日本に映画が入ってきたところから、池田に映画館「明治座」ができるまでのことを紹介しましょう。

映画百年

今年、平成7年は、日本で初めて映画が上映されて、100年目という記念すべき年に当たります。最初に日本に輸入された映画は、明治29年(1896)11月にまず神戸の神港倶楽部(現神戸市中央区)で上映されました。この時上映された映画は、その3年前にアメリカのトーマス・エジソンが発明したキネトスコープと呼ばれたもので、昔よく緑日などで見られたのぞきからくりのように、大きな箱の中の映像をのぞき穴から見るとい装置でした。もし、1月17日に起こった阪神・淡路大震災がなければ、神戸などでこれを記念した各種のイベントが催されたことでしょう。

翌年の明治30年には、フランスからスクリーンに映像を映し出すシネマトグラフという装置が輸入され、同年2月に今度は大阪の南地演舞場(現大阪市中央区)で上映されたといわれています。いわゆる活動写真の出現です。

地方巡回興行から常設館へ

活動写真は、ほぼ同時期に横浜や東京でも上映が始まり、映写だけではなく、撮影も国内で行われるようになりました。このころの活動写真は、むろん音声のないものでしたが、写真が動くというだけでも、当時としては大きな反響を呼んだといえます。また、当初はフィルム量が限られており、常設興行ができるような段階ではなく、地方巡回興行という形をとっていました。

日本最初の活動写真常設館、つまり、映画館ですが、これは、東京浅草に明治35年オープンしました。同40年には大阪にも映画館が作られ、千日前や道頓堀などに次々に新しい映画館がオープンすることになりました。

池田での常設館「明治座」

明治末年から大正にかけて、映画は大眾の中に深く浸透し、それまでにあつた歌舞伎や落語に肩を並べる大眾文化の一つとしての位置を確立するようになりました。しかし、常設館の設置は、大阪や神戸といった都市部だけでのことで、周辺地域ではまだまだ経営が成り立つ段階ではなかったようです。このころ、池田では前紹介しましたように、呉服座や明治座で各種の興行が行われていました。映画の巡回興行がなされたことはあつたかもしれませんが、常設館といふところまでには至っていませんでした。

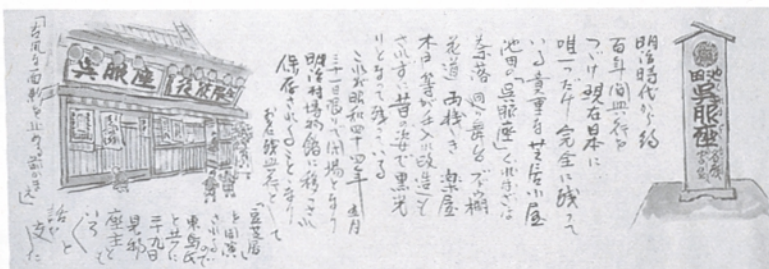
明治座のプログラム(大正14年2月18日)



呉服座の最終興行

少し話は変わりますが、明治座とともに人々をにぎわせた呉服座に関して、中堀嘉道さんが描いた昭和44年の呉服座最終興行の様子の資料「池田呉服座名残写絵」があります。これについて紹介します。これは、前回触れました市川市蔵劇団による

最終興行の様子を絵詞風に仕立てたもので、呉服座の由来から始まり、外観、木戸の様子、興行前の情景、出演者と演目、舞台での熱演、と順番に描かれています。軽妙な絵には「さて、場内は早々より近郷からのお客さんでいっぱいの大入」などの詞が挿入され、呉服座の廃業を惜しむ人々の声が伝わってきます。



呉服座の由来「池田呉服座名残写絵」



舞台での熱演「池田呉服座名残写絵」

資料提供のお願い

歴史民俗資料館では、戦前から昭和30年ごろまでの呉服座や明治座、また、川西座などの資料を調査しています。わずかでも結構です。そのころの各種芸能・映画などの関連資料をお持ちの方がいらつしやいましたら、ぜひお知らせください。

このコーナーでは、今秋、歴史民俗資料館で行われる特別展に関する資料を紹介しています。問い合わせは同館(☎51・3019)。